

視察研修報告

視察日：平成22年7月7日

1. 視察地：北海道小樽市（人口：133,604人、面積：243.30k㎡）

2. 小樽市について

- (1) 「小樽」という地名は、アイヌ語で「オタ・オル・ナイ」（砂浜の中の川の意味）と呼ばれたことに由来するものです。今から約400年前に松前藩の知行地として開かれ、やがてニシンを求めて定着する和人の数が年々増加し、1865年、漁業を中心とした集落314戸が建ち、村役人も決まり「村並み」の組織ができ、この年を小樽の開基としています。明治政府が北海道開拓の本府を札幌に決めると、小樽は札幌をはじめとする道内への物流拠点港となり、また、本州からの開拓移民も小樽へ上陸し、北海道の奥地へと向かう基地となりました。
- (2) 明治30年（1897年）から大正10年（1921年）にかけて総延長3,555mの南北防波堤も完成し、石炭はもとより、雑穀、日用雑貨等の輸出や移出が盛んになり、海産物は全国の7割が小樽に集まったといわれています。明治38年（1905年）に南樺太が日本の領土となってからは樺太航路が開設され、さらに第一次世界大戦の頃には欧米航路も開かれ、多くの船舶が来航し、港は大変なにぎわいでした。
- 色内本通りには多くの都市銀行や商社が軒を競い、「北のウォール街」と呼ばれ、小樽の穀物相場がロンドンの相場に影響を与えると言われるくらい、世界の商況を反映して活発な取引が繰り広げられました。
- (3) 第二次世界大戦後、経済情勢や流通機構が大きく変わったため、小樽の経済を支えてきた雑穀、海産物等の卸商は衰退の一途をたどり、多くの大手都市銀行の支店が撤退しました。「斜陽都市」といわれた長い停滞の後、経済の再興を図るため、札幌自動車道の建設、関西地方を結ぶ大型フェリーの就航、中央・勝納・色内各埠頭等の港湾施設の整備、小樽駅前再開発事業、国道拡幅工事、臨港線の建設等の施策が進められました。
- これらの都市基盤整備の中で、大正12年（1923年）に完成し、無用のものとなった「小樽運河」の埋め立て計画が持ち上がり、一大論争が繰り広げられるとともに、市内の石造りやレンガ造りなどの建物の保存や景観について注目を集めるようになりました。
- (4) 十数年に及んだ小樽運河の埋め立てを巡る論争は、昭和54年（1979年）に全面埋め立てから一部埋め立ての折衷案をもって決着し、昭和61年（1986年）4月に現在の小樽運河の姿として蘇りました。
- これを契機に、小樽は観光客が年々増加するようになり、年間714万4,500人の観光客（平成20年度現在）が小樽を訪れています。
- (5) 現在の小樽は、高い技術力を生かした機械、金属製品、家具、木製品や新鮮で豊富な素材等を利用した食品加工品を多く生産し、全国的な販路拡大に努めているとともに、港湾を活用した環日本海地域の物流・人流拠点として対岸諸国との交流も盛んであり、また、近年では小樽運河や石造倉庫をはじめとする歴史と文化、海・山など地域の特性を生かしたまちづくりにより観光地となり、「商工港湾観光都市」の性格を有しています。

3. 視察内容：小樽市上下水道ビジョンについて

(1) 市の概要について

- ・水道の概要：普及率 99.9%、給水人口 133,910 人、
一日平均給水量 48,218 m³
- ・下水道の概要 普及率 98.5%、水洗化率 95.2%、水洗化人口 125,785 人

(2) 上下水道ビジョン策定に至るまでの経緯・目的等について

小樽市の上下水道事業の経営環境は、人口減少や景気低迷などによる水需要の減少により上下水道事業の根幹をなす料金収入が減少している状況にあり、厳しさを増している。このような中、水需要の減少を始めとして、施設の老朽化や災害等の対応、経営基盤の安定化への取り組み、多様化するお客様ニーズに応じた良質なサービスの提供など、上下水道事業を取り巻く課題が山積みしている。限られた財源の中でこうした様々な課題に対処していくため、今後の上下水道事業のあるべき姿と目指す方向性を示した「小樽市上下水道ビジョン」を策定した。

(3) 上下水道ビジョンの内容・効果等について

・内容：あるべき姿と目指す方向性を示したもので、特に、「経営方針実現のための方策」において、7つの経営の方針と15の施策、41の実現方策を柱とした体系を示した内容になっている。計画の期間は、「第6次小樽市総合計画」の計画期間である「平成21年度から平成30年度まで」の10年間としている。

・効果：「普及の時代」から「維持管理の時代」、さらには「経営の時代」と言われる中で、人口の減少などに伴い水需要の減少が続き、今後も更に厳しい経営状況が続くことが予想される。このような中、今後の事業の経営に当たり、このビジョンに基づいて、職員一人ひとりがコスト意識を持ち、職員全員が一丸となって目標に向かって邁進できる。（進捗状況を毎年公表することで、業務に緊張感が出る。）

(4) 今後の課題等について

ビジョンを着実に遂行するためには、経営方針に基づいた41の実現方策を着実に実施する必要がある。そのためには、行動計画策定シートとフォローアップシートを作成し、このシートを使って毎年進捗状況を管理することが重要である。



小樽運河



小樽オルゴール堂